

序 古代・中世の境界意識と文化交流

竹田和夫

はじめに

近時、日本の領土をめぐる中国やロシアとの政治的な緊張関係が生じたことから、あらためて日本の国土領域や近接する国との関係に目が向けられ、国家の「境界」や日本列島をめぐる「境界」への関心がとみに高まっている。

またグローバル化の進展にとともに、地理・政治面のみならず、社会・文化全般にわたり、国と国との境目がボーダーレス化（無境界化）し、人や物・情報の移動が容易になり、こうしたことから国家間の境界が意識されるようになってきている。

境界意識の形成が本来的には政治的な動機に起因することは否定しない。しかし、前述したように、社会・文化領域も同時並行、あるいは時間差を有しつつも連関していることもまた事実である。

このような動きの中で、現在の境界認識に直接つながる近代的な境界の観念や国家四至（東・西・南・北）の根源が問われている。それはすなわち前近代、具体的には古代から近世にまたがる時期である。

本書は古代・中世の日本における境界意識の変遷と文化交流の実相を明らかにすることを試みるものである。

まず境界論の軌跡をたどり、その論点を確認すると同時に、課題を析出した上で、本書の構成とそのねらいを示したい。

一 境界論研究の動き

ここでは従来の国家領域を意識した境界論の整理に加えて、ともすると見過ごされてきた成果もふまえて整理してみたい。

従来、境界論の先駆となる指摘をしたのは後述する塚本学・網野善彦などとされてきたが、それより前に境界に対する具体的な認識が示されたのは石井進の研究である。一九六〇年代の後半に公となった石井進の北条氏所領研究は鎌倉時代政治史の基本論文とされているが、実はここでは、古代から中世への転換期において西（九州）の境界が顕現することを指摘しているのである。^① 中世の列島の境界を考察する観点の後年石井の遺著『日本の中世・中世のかたち』に継承され、列島全体の境界領域にまで拡大してとりあげている。なお、石井は山口昌男の中心と周縁の概念や民俗学的手法を用いた中世都市鎌倉の境界論を著した。これは列島内の都市境界論の先駆ともいえる。^③

石井の論考発表の後に発表された黒田日出男の田遊び論研究も境界論を内包していた。^④ なぜ黒田の研究が境界論なのかといえば、黒田は田遊び行事における鳥追いの詞章を紹介しており、これは後述する村井らの指摘する国家四至と重なる箇所が多いのである。それまで害鳥の追放先が民俗資料で示されることはあっても、民俗学からは漠然とした辺境の例示としか認識されることはなかった。

この鳥追い歌への着目は、二〇〇〇年代にまとめられた青山宏夫の研究に継承される。^⑤ 青山は鳥追い歌の分析から、追われる鳥の終着点のその先にある対岸がさらに異域として意識されていたことを明らかにした。

一九七〇年代後半になるといわゆる列島の北と南との視座からの境界論が登場する。北ではまず遠藤巖の研究をあげることができる。⁶ 遠藤は流刑地とされた夷島^{えいじま}に着目したのである。

この時期の古代史では、列島の辺境を天皇または国家の統治権の及ぶ範囲（化内）とその外の教化の及ばない地域（化外）を境界として位置づけたり、国家領域外の勢力を接する軍事的要所を「辺」「辺要」と位置づけることが行われている。⁷

一九八〇年代以降、日本や周辺諸国の政治・文化・社会を列島の枠を外し、地域のなかでとらえようとする境界論が盛んになる。

塚本は、九州と中国・朝鮮半島の間の海域を往来する人的ネットワークやボーダーレスの倭寇世界の存在を示した。⁸ これに続き、網野は列島を東と西に分かつ文化論を提示し、海と文化を考えるシリーズの編者をつとめた。これは結果的に国家四至を考える素材を提供したのではないだろうか。この成果をことあるごとにまとめてシリーズの成果を総括し、『網野善彦著作集』にも収められる一連の日本論で地域のあり方をダイナミックに、また細密に分析している。⁹ 周知のごとく従来の一国家・民族・文化論を批判したわけであるが、境界の有無や往来する人々を歴史家以外にも周知化した。

このような塚本や網野の提起により日本列島の領域だけでは完結しえない日本の境界論の可能性が少しずつ浮き彫りになった。

『講座日本の社会史』全六巻の刊行もこれに拍車をかけることになる。¹⁰ 社会史的観点からの境界や交通をテーマに掲げた巻は境界の歴史的 성격や社会的関係を明らかにしていくことになる。

境界論をさらに具体的に掘り下げたのは大石直正・村井章介・伊藤喜良である。大石・村井・伊藤の研究により列島各地の境界地の実態・痕跡や境界を往来する人々の存在が明らかになった。

大石は伊藤喜良・入間田宣夫・遠藤巖・小林清治との共著により東北地域の地域性を世に問う^①。その後、外が浜や蝦夷島など、北海道・東北における国境の実態を明らかにした^②。

村井は、古代から中世への国家四至意識の形成と変化についてまとめ、国境をまたいで活動する人々を境界人（マージナル・マン）と名づけた^③。

また、伊藤喜良は歴史学研究会の一九八七年度大会で「日本中世における国家領域観と異類異形」のテーマで報告を行ない、流刑地として境界地が選ばれ、遠流地は伊豆国・安房国・常陸国・土佐国であることを指摘した^④。ところで、井原今朝男は国家儀礼の民間への浸透に着目している。十一世紀から仁王経や大般若経の法会も増加し、中世後期には修正会が民間習俗化し、さらに鬼や御霊を送るという指摘をしているが、これは伊藤らの論点と重なる部分が多い^⑤。

これらの中世史の成果はまた古代史の研究とも符合する。前田晴人は、宮廷祭式の道饗祭・疫神祭は四方四隅の地である衢^{ちまた}の境界意識や律令的境界祭祀を説いた^⑥。また、大日方克己は、村井らが注目した九世紀からケガレ観念を祓う大般若経・最勝王経転読と御霊信仰の列島各地への浸透に注目している^⑦。

このように古代史・中世史の成果が交差したことにより、古代から中世の転換期における境界の構造が浮き彫りになったのである。こうした歴史学の成果に、民俗学が注目してきた境界の周縁に住む人が鬼と意識する概念もこれに重ねられた。

辺境や異域の住人を畏怖し、鬼と意識することになるのは九〜十世紀とされる。十〜十一世紀になると天皇の清浄化をもとめる宮廷儀礼が肥大化していた。こうして七瀬祓・河臨祭・四角四境祭・御霊会などが京都から地方へ広がっていく。これは穢れの追放の図式であり、天皇↓大内裏↓洛中↓洛外↓山城↓国家四至外へと拡散していく。穢れの阻止儀礼はこの逆で行われた。

さて、大石・村井・伊藤らの研究は、上記に加えて、日本列島の四至（東西南北の境界）が古代の延喜式をはじめ、中世の文書や物語に見えること、東の境界は陸奥・蝦夷が島、西は九州・鬼界島、北辺は佐渡、南は土佐・熊野と認識されており、現代の東西南北の地理感覚とは異なり、古代中世特有の認識がなされていたことを明らかにした。

ただしこの四至の認識については、最近、北方史研究者の小口雅史と律令制度の研究で知られる坂上康俊により新しい見解が示されている^⑮。すなわち、小口によれば北辺は佐渡のみならず出羽も意識されていたこと、坂上は、佐渡・土佐はそれぞれ国制上の「道」の末尾の行政単位をあげたにすぎないと提起しているのである。

また、境界論では前述した黒田日出男には鳥追い歌以外の境界研究もある^⑯。列島内の空間としての境界の分析が中心ではあるが、何よりも「境界」というテーマを冠した専門書を刊行した意義は大きい。

古代・中世における境界の意識は、近世になっても変化しながら残存し続けた。歌舞伎の脚本を見ると以下①～③の文言のようにその痕跡をうかがうことができる。

① 「矢の根」…東は奥州外ヶ浜、西は鎮西鬼界ヶ島、南は紀の路熊野浦、北は越後の荒海^⑰、の文言。

② 「鳴神」…東は奥州外ヶ浜、西は鎮西鬼界がしま、南は紀の路那智の瀧、北は越後のあらうみ、の文言があり、和歌では蝦夷・津軽を意識している^⑱。

③ 「新色五巻書」…西の果ては杵岐・対馬の文言。

一九九〇年代に境界論を推進した成果として、村井章介・荒野泰典・石井正敏『アジアのなかの日本史』全六巻が代表的なものと言えるだろう^⑲。

続いて境界の意識について正面からとりあげる通史も刊行されるようになり、入間田宣夫・豊見山和行編『日本の中世 北の平泉、南の琉球』、大石直正・高良倉吉・高橋公明編『日本の歴史 十四 周縁から見た中世日

本』が編まれた。ただし、それらの企画では東北・北海道や琉球が直接の対象となっている。²⁴⁾

ブルース・バートンやロナルド・トビらの外国人から見た日本の国境・境界への研究も見逃せない。²⁵⁾

ブルース・バートンによれば、国境をフロンティア（前近代の国境）とバウンダリー（近代の国境）に区分している。さらに日本の国境の機能を人の移動・物の移動・情報の移動に分けている。

ロナルド・トビは、近世における国境意識を明らかにし、外から流入する境界と外へ流出する境界という双方向性を明らかにした。トビによれば、近世日本の境界の実態は明確でなく、海の潮境にのみ見えているという。

また近年の歴史学界のシンポジウムでも境界論がとりあげられている。

一九九〇年の歴史学研究会大会では「歴史認識における境界」を全体テーマに掲げた。榎森進「十三〜十九世紀の日本における北方地域の境界認識」、大日方克己「古代における国家と境界」などの報告がなされた。²⁶⁾

史学会では、列島周縁の境界を考えるシンポジウムの記録を中心に『境界の日本史』として公刊し、セッション「中世の境界と領域」を収めた『歴史学の最前線』も出している。²⁷⁾ 史学研究会の雑誌『史林』では「特集国境」が組まれた。紀平英作の序文と、藤沢敦による考古学から見た国家・民族の境界の論考などや上原真人による考古学や濱田正美による歴史学からのコメントが収められている。²⁸⁾ 特に藤沢による考古学からの境界論は説得力がある。

このように一九八〇年代以降急速に発展した境界論の成果は、現在刊行中の荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係』シリーズに反映されている。縦軸（時代別変化）を追った論文と横軸（テーマ別論文）双方の構成に目を通すと、日本の領域や日本人の範疇が不定形で流動的なものであることが見えてくる。²⁹⁾

さらに科学研究費補助金による学際的研究により、国境を越える人・物・情報・技術の交流は東アジア全体の広範な相互認識の中に位置づけがなされるようになってきたのである。³⁰⁾